慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	あとがき：ものを書く喜び
Sub Title	
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学商学会
Publication year	2022
Jtitle	三田商学研究学生論文集 No.2021 ,p.315- 315
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00113718-00002021-0315

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あとがき

――ものを書く喜び――

商学会の委員長としてこの「あとがき」を書かなければならないことになったため，過去の委員長はどのようなことを書いているのか，ということでバックナンバーを捲ってみたところ，やはり大半は‘論文を執筆することの意義’についてだった。各人各様の面もあれば，すべてに通底するものもあり，いずれにしても，ここでまた‘意義’などといった立派なことを書くのも，屋下に屋を架す，とはいえないまでも，芸がないというか，面白くない。というわけで，軽めに書く。

初めて自分の本が出たときには嬉しくて枕許に置いて寝た，などという人がいる。むろん，こうしたことは，別に本でなくとも，例えば論文の類いでも同様で，初めて自分の書いたものが活字になったときにはとても嬉しいものである。

ものを書く仕事は 4 回も楽しめる。すなわち，①原稿を書き終えたときに嬉しく，②ゲラ刷りが届いたときに嬉しく，③その本や掲載誌が実際に刊行されたときに嬉しく，④読者等から反響があったとき（褒められたとき）に嬉しい，ということである。なお，かつての‘手書きの時代’には，手書きのものが活字になった，ということで，②の嬉しさが今よりもずっと大きかったのだが，しかし，今でも②の嬉しさはある。

また，冒頭では，初めて自分の本が出たときには，としたが，これは必ずしも正しくない。少なくともボクの場合，初めて自分の本が出たときには，むろん，嬉しかったが，しかし，限界効用が逓減しない，というべきか，2 冊目が出たときにも，10 冊目が出たときにも，20 冊目が出たときにも，同じくらい嬉しく，嬉しさの質は違っていたが（つまり，1 冊目には 1 冊目の嬉しさ，20 冊目には 20 冊目の嬉しさがあったが），嬉しさの程度は変わらなかった。叙上のように，これは，本に限ったことではなく，論文の類いでも同様である。

このように，1 冊ないし 1 篇で 4 回も嬉しく，しかも，数が増えても嬉しさが逓減しない，という意味においても，活字になるものを書ける，ということはなかなかに幸せなことである。

入賞者の諸君もきっと如上の嬉しさを味わってもらえたものと思う。

商学会委員長
友　岡　　賛